

## 「橋をかける人」

拓殖大学北海道短期大学  
環境農学科 2年 岡本大輔

私が、北海道深川市にある拓殖大学北海道短期大学(以下 拓大)に入学して、二年目になります。この拓大には、社会人学生に対しての優遇措置のようなものがあり、それを利用してこの学校に入学することになりました。つまり、私は社会人学生です。その意味で、私はいわゆる一般の学生とは違うかもしれません。ですが、この一年間一般学生と共に一緒に勉強してきた経験をもとに酪農に対する自分なりの「夢」を語っていきたいと思います。

まず、ここで告白しなければならないことがあります。実は拓大では、酪農を学ぶことができません。環境農学科という名前のとおり、環境と農業といった観点から、作物の育成の方法や生理を学んだり、今、話題になってきているグリーン・ツーリズムを担当教員である橋本先生から学んだりしています。しかし、酪農の講義はありません。

では、どうして酪農についての「夢」を語るのか、そのことからお話したいと思います。私は、社会人学生として入学したと前述しましたが、その前までは農業とは全く関係ない仕事をしていました。私の頭のなかでは、いわゆる酪農と作物をつくる農業は、「食」を扱うという部分においてあまり違いがないという感覚でした。正直に言えば、拓大に入学する前は酪農や農業について興味がほとんどありませんでした。

ある時期その興味の方向性に変化が生じます。以前していた仕事が煮詰まって、次にどうしようか迷っていた時、拓大の社会人学生の優遇措置があることを聞いて、それに飛びつくことに決めたわけです。また、住む場所として深川の隣にある秩父別(ちっぷべつ)というところに市民農園があり、そこで初体験ながら農業をしながら拓大に通うことができるという話も魅力的でした。そんなわけで、拓大を志望することに決めました。

拓大の環境農学科に入学後は大変でした。何と云っても、農業というものを知らない人間が農業の講義を理解するには、時間がかかります。他の一般学生は、農業高校出身であったり、農家の子弟であったりするので、実習を同じようにしていても作業効率と講義の理解のスピードが全く違います。その点についていくのに当初苦労しました。

農業という全く違う世界で勉強して1年が立ち、なんとか講義や実習の話に危なっかしくもついていけるようになったころ、深川市の近くにある旭川市に市民農業大学というものがあるという話を聞きました。この市民農業大学というものは、さまざまな分野の農業者の方々のところに行って、月に1度実習させてもらうことができるというものです。大学で農業を学んでいることもあって、今度は自分が学んでいることとは違うものを選択してみようと考えて、酪農を選択しました。そこでは、牛を飼っています。

農作物のことと同様、酪農についても初体験です。恥ずかしい話ですが、牛を身近に

---

見てあんなに大きいということを知りませんでした。実習先のご夫婦は、教育ファームとしてさまざまな人たちを受け入れていて初心者慣れていることもあって、丁寧に教えてくださいます。乳搾りも初体験でしたが、当初なかなか乳を絞れなかったものが、絞れたときの感動は忘れられません。

酪農の魅力とは何かということ語るのは、まだ1か月に1回程度通うペースのものを、3回しか行っていない人間が語るのは恐縮なのですが、あえて語ってみたいと思います。酪農の魅力はさまざまにあると思います。私が考える酪農の魅力は、酪農が「生き物と付き合い合っていくお仕事」であることと、酪農のお仕事をするなかでの「時間の流れの心地よさ」なのではないかと考えます。

「生き物と付き合い合っていくお仕事」であることは、酪農であるから当然のことかもしれませんが、生き物とこれだけずっと付き合い合っていく職業は他にはありません。市民農業大学でも、朝5時半から夕方まで実習させてもらいます。そのなかでは牛を放牧場から戻して搾乳、また放牧、牛舎の掃除などもさせてもらいます。こうした作業を毎日毎日していくことを考えると、もちろん生活のこともあるので必死でしょうが、生き物と付き合い合っていくことがある程度好きではないとできない職業だと考えます。個人的には、牛舎の掃除をするときに糞尿があるのでどうなるものかと考えていましたが、意外と平気で牛舎を掃除することができました。そして、牛と関わっていると心が和みました。

次に、「時間の流れの心地よさ」についてです。生き物と付き合い合っていくということに多少関わることもかもしれませんが、酪農というお仕事は毎日毎日ほぼ同じ作業をなぞります。それを単調な仕事というふうに表すことが出来るかもしれませんが、私はそうは思いません。同じ仕事といってもその日によって、きっと仕事の内容は違うのだと考えます。その意味で同じ仕事をしている日は1日もないのだと考えます。また、生き物にかかわっていると、例えば、牧場周辺の季節の移り変わりやまわりの草花の様子についても目が向くことでしょう。酪農というものは自然と関わっていく職業であり、また自然を意識していく職業でもあることが魅力的なのではないかと考えます。

最近では、スローフード運動が日本に紹介されていることもあり、徐々にではありますが生活の豊かさについて見直されようとしています。スローフードという言葉にはさまざまな意味があると考えますが、そのなかには生活の時間をゆっくりと楽しむという含意もあるように感じます。酪農には、そのゆっくりと楽しむというコンセプトが埋め込まれているように感じます。

その一例として、市民農業大学での実習日のことを述べます。朝5時半からの作業のあと9時くらいから朝食があります。その朝食は、みんなで用意し、食べる時間には朝食で出てきている料理について語ったり、冗談を言い合ったりしながら食べます。その場の雰囲気はとても楽しいです。酪農の良さは、こうしたさまざまな人や家族とゆっくり話をしたり、楽しん

---

だりする時間を共有することができるということにもあるのではないかと思います。それを私は豊かだと考えるのです。

さて、酪農に対する「夢」についてです。表題には「橋をかける人」と書かれています。もちろん、物理的な橋をかけようとしているわけではありません。私が目指すのは、人と人、ある領域とある領域とを架橋する人間になりたいと考えているのです。

拓大に入って1年間自分にとって未知の領域である農業について学び、そしてさらに酪農について学んでいます。今、感じているのは、「自分には何と知らないことが多いのだろう」ということです。無論、社会のすべてを知り尽くすのは難しいでしょう。でも、昔の人が知らない人の職を聞けば、何となくでも想像できるような共通感覚があったのではないのでしょうか。それに昔はいろんなことがもっと身近だったのではないかと考えます。そうした共通感覚は、現在の社会の仕組みでは感じるようになっていないように感じます。

せっかく拓大で農業を学び、そして酪農の仕事を経験する機会を得ました。この経験を通じて、いろんな人に酪農を伝えることができるのではないかと考えます。思えば、私が拓大に入る前にもさまざまな人が、拓大であったり、酪農であったりといったものに橋を架けてくれました。私自身も誰かのために橋を架けられるように、もっともっと学んでいきたいと考えています。

---